

すくわくプログラム推進事業実践報告書

所在地	新宿区中落合 3-21-10
施設名	ウイズブック保育園中落合

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然/生き物（ザリガニ・虫） 4歳 5歳

<テーマの設定理由>

本園では、オリジナル絵本を用いたウイズブックプログラムを通して、子どもの興味関心や発達に合わせた活動を行い、「やってみたい」「知りたい」という思いを大切にしています。すだち組のすくわくで捕まえてきたザリガニに興味を示す姿が見られたほか、戸外活動の中でも「虫を捕まえたい」「虫を飼ってみたい」といった発言や、虫を探して観察する様子が多く見られました。こうした姿から、子ども達が「虫」に強い興味関心をもっていると判断しました。

2. 活動スケジュール

5月

- 自然の多い公園（石神井公園）で探検
- ザリガニを絵の具で表現

6月

- ザリガニになりきってダンス
- 年間を通して虫を育て始める
- カブトムシを観察

7月

- 虫のダンスを踊る
- 虫の製作を行う
- 1年間、虫を育て続ける

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

〈素材・道具〉

タクシー利用、袋、ザリガニ釣り用の凧糸、あたりめ、プラスチックケース
ザリガニ飼育セット（プラスチックケース、砂利、水草、餌）、カブトムシ
絵の具、筆、絵の具の溶き皿、画用紙、プロジェクター、パソコン、お面用画用紙・
素材

CD プレイヤー、ストロー、モール、ダンボール、画用紙、牛乳パック、毛糸、きら
きらシート、折り紙、ポンド、綿棒

〈環境設定〉

探検活動

子どもたちが安全かつ体力的に楽しめるよう、移動にはタクシーを利用。ザリガニ釣りは子どもの集中や興味に合わせて、時間を柔軟に延長。

観察・飼育

カブトムシは机の中央に置き、全員が見やすい環境を確保。ザリガニやカブトムシに向かってダンスを楽しめるスペースを広く設定。

表現活動

絵の具での表現は上手・下手にこだわらず、自由にのびのび描けるよう関わる。保育者も子どもと一緒に楽しむ姿を見せ、模倣や表現のきっかけを作る。

製作・触覚体験

様々な素材に触れられる環境を用意し、子どもが自由に組み合わせや工夫を楽しめるように配置。

4. 探究活動の実践

〈活動内容〉

- ・森の一本道を子どもたちが自由に探検し、自然の中で何に興味を持つかを観察した。池ではザリガニ釣りをを行い、生き物との触れ合いを楽しんだ。
- ・園でザリガニを育てる中で、クラスの仲間としての意識が育ち、子どもたちは自分の好きなザリガニを絵の具でのびのびと表現した。
- ・プロジェクターで「ザリガニチョッピン」や「エビカニクス」などのダンス動画を映し、広い空間でザリガニになりきってダンスを楽しんだ。途中でお面を作り、表現活動をさらに盛り上げた。
- ・毎日カブトムシの世話や観察を行い、成長や行動に関心を持つ姿を見守った。
- ・カブトムシやザリガニに向かって、虫のダンスを踊り、身体表現を楽しんだ。
- ・さまざまな素材を用いて虫の製作活動を行い、想像力や創造力を広げた。

〈活動の内容〉

〈活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

子どもたちは探検の中で石や葉をめくり、「なんかいる！」と友だちや保育者に知らせたり、「どうやって捕まえようか」と袋や枝を使いながら工夫していた。保育者はその気づきに共感しながら見守り、「どうしたらいいかな」と問いかけることで、子ども同士のやり取りや試行錯誤を引き出していた。また、虫の大きさの違いに気づき「お父さん・お母さん・子ども」と表現する姿や、「なんで赤くないの？」と疑問をもつ姿に対しても、共に考える関わりを大切にしていた。ザリガニに対しては「触ってみたいけど怖い」と葛藤する姿に寄り添いながら関わることで、徐々に自分から触れたり掴んだりする子が増えていった。観察を重ねる中で「お腹に点がある」「足は何本だろう」といった気づき生まれ、保育者はその発見を受け止めながら、さらにじっくり見られるよう関わっていた。子どもたちは手でハサミを作ったり全身で動きを表現し、「ザリガニだぞ」と友だちや保育者と楽しみながら表現を広げていた。カブトムシの観察では、「なんで隠れているの？」といった疑問に対し、保育者は図鑑を一緒に見たり、友だちに聞いてみることを促すなど、主体的に調べる関わりを行っていた。また、動きを真似たり話しかけたりする姿を受け止めながら、「見てたかな？」と虫の様子と一緒に確かめることで、相手を意識した関わりへとつながっていた。製作活動では、「これ羽みたい」「足じゃない？」と友だち同士でイメージを共有する姿を見守りながら、様々な素材に触れられる環境を整え、表現を支えていた。完成した作品を本物の虫に見せる姿も見られ、保育者はその思いに共感しながら関わることで、観察・表現・遊びがつながり、子どもたちの興味や探求がさらに深まっていった。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

実際に生き物に触れる体験を通して、子どもたちは虫への興味を深め、体のつくりや動きに着目した発見を重ねていた。普段は生き物に触れることに慎重な子ども、友だちと気づきを伝え合う中で関わろうとする姿が見られ、探究を共に楽しむ様子が印象的であった。また、ザリガニやカブトムシへの親しみが深まることで、観察だけでなく絵画やダンスなど様々な表現へとつながり、のびのびと自己表現する姿が見られた。

保育者が答えを伝えるのではなく、子どもと共に不思議さや面白さに寄り添う関わりを大切にすることで、子ども自身が考えたり調べたりする主体的な姿へとつながっていった。さらに、友だち同士で教え合ったり刺激を受け合う中で、関わりや学びが広がり、継続的な飼育を通して愛着や責任感も育まれていた。

今後は「なぜ色や形が違うのか」「どのように生活しているのか」といった問いを大切にしながら、図鑑や観察記録を取り入れた調べる環境や、虫の生活を再現できる環境を工夫していきたい。また、素材や表現方法をさらに広げることで、子どもたちの気づきやイメージをより豊かに表現できる活動へとつなげていきたい。